

<発表タイトル>

オスカー・ワイルドにおける好奇心（curiosity）： 唯美主義の継承と逸脱

<要旨>

Oscar Wilde のテキストのあちこちに張り巡らされている‘curious’や‘curiosity’
といった言葉は、‘culture’や‘criticism’、‘cosmopolitanism’などとの同時代的な結び
つきにも関わらず、これまでほとんど注目されてこなかった。「好奇心」(curiosity)
には、しかしながら 1860 年代から世紀末にかけての唯美主義 (Aestheticism) の
知的コンテクストを形作りまた読み解くための新たなキーワードとして、それ
らの用語に劣らぬ同時代的そして文化史 (精神史) 的意義が秘められている。

本発表では、*The Picture of Dorian Gray* (1890/91) や *Intentions* (1891) を含むテク
ストの精読と分析を通じて、ワイルドにおける様々な「好奇心」表象が、先行す
る批評家 Matthew Arnold の文化論や Walter Pater の美学における「好奇心」をい
かに発展的に継承しているかを示しながら、同時に、19 世紀後半のイギリスに
おける唯美主義、セクシュアリティ、コスモポリタニズム (共同体意識) が、そ
れぞれワイルドにおける「好奇心」表象といかに連動し、分かち難く結びついて
いるのかを明らかにする。